

保育の体験と思索

——子どもの世界の探求(三十三)——



津 守 真

五歳児三学期

それぞれの子どもが自分のしようと思うことを持ち、それをするのできる保育

一月十六日

五歳児の最終の学期である。

朝、私は附属幼稚園にゆくとすぐに、Sが傍にくる。昨年終りに私にあずけたセロテープのボールのことをたずねる。これはSがセロテープを固く貼り合わせて作った球状のボールである。

Sはそのことを忘れないでいた。

室内で、Iがおいも売りとかくじびぎの店をやっていて私をよぶ。おいもは紙をまるめて包んだものである。お金を払わないとおいもを売ってくれないので、私は机に坐って十円玉をつくる。それとひきかえにおいもをもらおうと、細長い紙に1から9までの数字がかいてあるくじびぎをひかせてくれる。数字を選ぶと、裏側に○と×が書いてあり、○だと箱に手をいれて小さな紙片を取り出す。それにまた○と×がかいてあり、○だとおいもをくれる。私は机の上でお金を作っていると、いろいろの子どもが次々にお金をもらいにくる。私はお年玉だと云ってお金を作ってやる

と、「お年玉ちょうだい」と云つて、何度も次々にお金をもらいにくる。こうしてくじびきの店が繁昌する。

くじびきの交換あそびは随分長く続いた。単純な交換作業である。しかし、一時は繁昌したくじびきも、いつのまにか人がいなくなつてしまった。それぞれ違う遊びに向つていったのである。

Mくんが庭から入つてきて、H先生に、そこに出つていたダンボール箱を使つていいかとたずねる。それには何かが入つていたので、H先生は別の同大のダンボール箱を出してきてMくんに与える。Mくんは、ダンボール箱の一方に出入口をつけ、他の面に窓口と十円入れ口をつけて、自分はダンボール箱の中にはいる。外から10円をいれると、窓口から何かがとび出してくる仕掛である。次々に子どもたちがきて、10円をいれてゆく。Mくんはダンボール箱の中に入ったまま、ほとんど出てこない。

この間、Kは私の膝に腰かけて、ずつとお金つくりをしていった。同じ机のわきで、Uは熱心に飛行機を作つていた。

間もなく私は庭に出て、たかおにをすることになった。これで殆ど午前中は終つて、昼のお弁当になる。弁当のとき、Nは机のはしを私のためにあけて待つてゐる。

それぞれの子どもが、自分がしようと思つてゐるのを

見ることができるとき、おとなは心の奥に満足を感じるのではないだろうか。しようと思つてゐること、あたりまえのように見えるが、子どもをそういう状態に維持するのはむづかしいことなのである。ここに掲げた五歳児三学期の記録は、とり上げるに足りない小さなことばかりのようであるけれども、それぞれの子どもが、自分がしようと思つてゐることを持ち、それをしていくという点で、保育の一つの典型である。ここに記してあるのは、この日にこのクラスで起つていたことの一部分であるにすぎない。ここに見えていないところでも、子どもたちはそれぞれ自分の思うことをして遊んでいたのであることは疑いない。私は、私の周囲の子どもたちとの間で、その求めに応じて行動し、その子どもたちが自分の世界を展開するのに支え手とならうとしていく。その私をも含めてクラス全体の担任の保育者は、クラスの皆がそれぞれ思うところを実現するように、心を配つて保育してゐる。

この日の記録でも、Mくんが庭から入つてきて、担任の先生に、そこに出つていたダンボール箱を使いたい意志を表明する。それが何に使われようとしているのかは先生には分らない。しかし、Mくんがそう思い始めたことを何とか実現させてやろうと、先生は別のダンボール箱を出してやる。実際、私は傍にいて、私

だったら、このとっきの間に、素直にこのように応じることができたろうかと自分自身に対して反省をしていたのである。このあとのMくんの遊びを見ると、そのダンボール箱の薄暗い中に入って、お金と交換にいろいろの物を窓口から出す交換遊びを長い時間やっていた。Mくんは、このシリーズで、三歳児のはじめから、何度も登場してきた。ときにはめを外しがちな元気の良い男児である。五歳児になってから、小さな女の子とも対等に遊ぶことが見られるようになってきた。そしていま、このダンボール箱の窓口を通して、クラスの子どものとも交わっている。ダンボール箱という小さなきっかけから、この子どもにとって重要な体験が生れている。

この日の午前の遊びには、面白いことがまだいくつもある。くじびき遊びのIは、四歳児から入った子どもで、入園当初には、字を書いたり、三角や四角を書いて得意になっていた。その子どもが砂遊びに熱中し、形をくずすようになる過程については、このシリーズで取り上げた。(第七十六巻第十二号)長い間、屋外の遊びが多かったこの子どもが、五歳の後半には室内で遊ぶ。そしてこの日の室内の遊びは、くじびきという友だちを相手にする知的な活動である。この子どもの知的関心は、いまや、他の諸面とのバランスをもって育ってきているのを見ることができている。

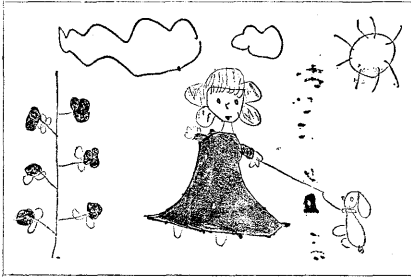
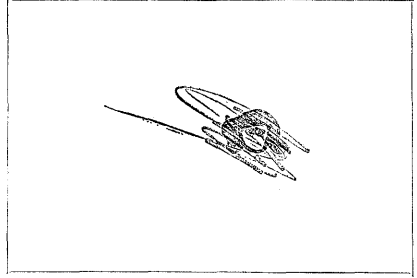
五歳児の三学期、それまでの二年、三年を幼稚園で過してきた幼児たちは、それぞれに充実した興味深い姿を見せてくれる。三学期の幼稚園の生活の中から、そのような姿をもう少し拾ってみることにする。

実のなる木の描画

一月二十三日

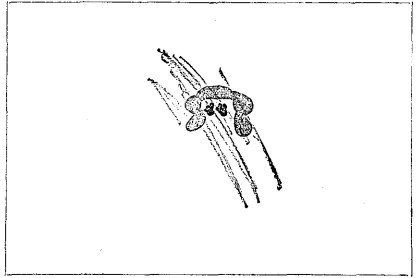
女兒のZとOと、もう一人の女兒と三人が一つの机でえをかいている。私も同じ机で紙をいじっている。Zはかきかけてその上をマジックの往復線でけし、「あげる」といって私にくれる。次の画用紙も同じように女の子の顔をかきかけて、マジックの往復線でけし、私にくれる。こうして、四枚つづけてかきかけてはけして私にくれる。(写真1、2) Oは自分のえをかきながら、「けさないでやったら」「またけしてある」などという。そのうちにZは次の画用紙にかきはじめ、私に目をつぶっているようにいう。できると、それを私にくれる。それが写真3である。両手をひろげた女の子が、犬を引張っている。洋服は赤いマジックでぬりつぶしてある。画面左には、一本の木が描かれ、両側に出た

写真 1 ▶



▲写真 3

写真 2 ▶



枝の先には木の実がついており、赤いマジックで丸くぬってある。空には雲とお日さまが描かれている。画用紙の裏には、「おじさん」と字がかかっている。

Zはこれまでも、しばしば私のところにベタベタとくっついてきた子どもで、何か屈たくありげであった。私はしばしば、この子に寄りかかれるとき、重たく感じていた。この日も、最初、女の子の顔をかきかけてはマジックでぬりつぶしたのは、自分の心に描いている理想像と一致せず、気に入らなかったのだろう。そして最後にかいたのは、いつものZが描いたものとは思えないような、堂々とした女の子であった。ひもをつけて引張っている犬は、このように開花する以前の動物に近いZの姿と見てもよいのではないかと思う。画面の左側に描かれた直立した木は、両側に枝が張り、枝の先には赤い実がついている。これでZは満足した。最初、Zが描きたいと思っていたのは、こういう堂々とした女の子の姿であり、赤い実を結はせるイメージであったことがわかる。これをかき終ったときのZは、私には、いつもの何かすねたような表情ではなくて、この絵のような堂々とした女の子に見えた。

「実のなる木」は、児童画の研究の中に、洋の東西を問わず、しばしばあらわれるテーマである。たとえば、エングの有名な児童画の研究の中で、マルガレエテは六歳五カ月のときに、樹木の枝に沢山の赤い実のなる木を描いている。(ヘルガ・エング 外山 卯三郎訳「児童画の心理」暁教育図書 昭33) また、エングは、児童画研究の古典であるケルシュンシュタイナーを引用して、樹木の描画の一形式として、羽根状に出た枝の先に果樹のつけられたものを挙げている。丁度ここに掲げた写真3と同様の画である。また、ケログの描画のコレクションの中にも、分枝した枝に円形の実のつけられた例(5—7歳)がいくつもある。(R. Kellog, Analyzing Children's Art, 1969) 私が見た日本の子ども描画にも、実のなる木は多くあるし、その中にあるものは、明らかに子ども自身がある充実した段階に達したときに描かれている。子どもが実のなる木を描くとき、まずはっきりした垂直線を描き、その両側に上昇方向の放射線の枝を描く。その線の性質だけからみても、高揚と安定を感じさせられる。更にその枝の先につけられた円形と、赤い色には華やかな気分がある。線の性質を見るだけでなく、これを描くときの子どもの内面の状態を察してみるので、子どもの中には赤い実のなる木が思い浮べられているのである。冬でも赤い実をつける青木の実は、子どもの目を容易にひ

きつけるものである。ある期間をへて、木が実を結ぶことを、子どもは知識としてではなく、時間的経過の体験として持っているのではないだろうか、そこで成熟のイメージが木の实と結びついてあらわれるのではなからうか。この日にZが描いた実のなる木には、この日のこれに先立つ数枚の未完の描画の結実としての意味と、それからまた、二年間の幼稚園の生活の中で、次第に自分で遊べるようになってきたZ自身の心の中に貯えられてきた成熟の感覚とがあらわれているように思われる。

ここでもう一つ興味深いことは、傍にいた女兒Oが、「けさないでやったら」「またけしてある」などと、Zのえに対して批判していることである。たいがいの場合、子どもは他の子どもの描いたものを見たときに、どんなものでも、感心して見る人が多いように思う。子どもは外面だけから見るとはなく、描くときの感情や内面を見ているのであろう。自分も共に描くものとしての共感が根底にあるのだろう。ところがここでは、Oはけさないでかくのがよいという明瞭な規準をもって、描かれた結果を外面から見て批判している。これは五歳の三学期ころになると、おとなの目が子どもの中に作られることを示している。社会的にはおとなの規準に沿ったしつけのよい子どもかもしれないが、そのた

めに子どもらしい素材さを失いつつあるのではないかを恐れる。

がま蛙

三月十日

朝、園庭で、男児Tはしゃがんでがま蛙を見ている。私も一緒にしゃがんでみる。Tはがま蛙を手にしたがりしている。がま蛙は庭をはねてゆく。Tと男児五人ががま蛙を追って、同じような恰好をしてはねてとんで歩く、その姿がいかに面白い。川の流れの傍にゆくと、子どもたちはがま蛙を水たまりにいれる。がま蛙は、はって出てくる。するとまた水にいれる。がま蛙はSの方にはってくる。N「やっぱり、Sくんが好きなんだよな」S（まんざらでもなさそうにいう）「これ土がえるだよ。水蛙もあるよ。両蛙。土がえるだから、水の中に入れるんじゃないよ」子どもたちは、蛙を水にいれたり出したりする。蛙は崖をはって上ってゆく。何人かの子どもたちは崖の上について見る。Nが「もったい人のもっていいよ」というと、Tはがま蛙を手にしたがり庭の中央にくる。女児Mがくる。Tは「こわくないよ、さわらせてあげようか」と差し出すと、Mは「イヤー」といって逃げる。こうして蛙とのあそびが続く。

子どもたちは、庭にしゃがんでじっとがま蛙をみつめ、蛙がとびはねて歩くと、同じような恰好をして跳んで歩く。それは子どもが蛙に興味をもってその跳び方をまねているというだけではない。蛙の生活に自分と共通のものを見出し、おとなからは見えない子ども達の想像の世界の中で、がま蛙になっているのではないだろうが、蛙は水の中に入れても平気だし、水から出して土の上におくこともできる。水から出せば死んでしまう魚とは違ひ、水の中にいれることができる虫とも違ひ、蛙は水の中と水の外と両方の世界で生きていることを子どもはよく承知している。そのことは、ここに掲げた、蛙との子どもの遊びや会話にもあらわれている。水の中は守られた世界とすれば、水の外は冒険してどこまでも歩いてゆくことのできる外の世界である。子ども自身の中にも、守られた空間に安住する気持と、未知の世界に一人で出てゆこうとする冒険心とが共存して、揺れ動いている。相反する両極の間に生きることは、人間の宿命のようなものでもあり、心のどこかにそのことが感得される時、人は両極の世界に棲む蛙に共感するのであろう。両棲類は、体の表面も液体と固体の両方を感ぜさせ、そのぬめぬめした感触が人の共感をも誘うし、また、嫌悪感をも生む。がま蛙を掌の上のせて愛玩する子どもと、見

るだけで立ちすくむ子どももあり、それぞれの個性である。

私は伊勢の二見ヶ浦に何度もいったことがある。海の中に立つ夫婦岩は日の出を拝む場所として有名であるが、その二見神社には、海に面した岩の上にも、山腹の洞の中にも、大小さまざまな蛙の彫物がある。青く広がる海の上に昇る日の出と蛙とは対照的なもの思われる。けれども、暗い夜が明けて日の出を見るときは、明るさのみに気を奪われるのでなく、明暗両方の世界に仕むのが人間であることを気付かされ、ここがま蛙の彫物を置いたのは、昔の人の心の自然な動きであったのだと思う。

その蛙の目は上方を向いている。暗い泥水の中に身を沈めながらも、目は陸上の世界を観察しているのが蛙である。これはまた、栄光の中だけに生きるのではない平凡な人間の生きる姿を象徴するものでもある。その蛙は陸の上を歩くと、ぶざまにびんびんと跳んで歩く。蛙とすれば精一杯に天空に高くとび上る努力と見ることもできる。しかし外から見れば、恰好のわらいとび方である。これは平凡な人間の生きる姿そのものである。子どもたちは、そのがま蛙の跳び方をまねて、とんで歩く。

蛙については、昔からの物語や風俗などを調べれば、いろいろの見方をするができるだろうし、子どものことを考えるのに面白い材料を提供してくれるだろうと思う。私はそのいずれか

の解釈を子どもの行動にあてはめて考えようとしているわけではない。しかし、子どもがそれほどまでにこの小さな生きものに對して抱いている強い関心を見るときに、蛙の生活の仕方の性質が子どもの内面に訴えるものがあるのだろうと思うのである。蛙を特別に好む子どもも多いので、それは何故であるのか、まだいろいろと考えてゆくことは多くある。

五歳児三学期、幼稚園の生活も終ろうとするこの時期に、子どもたちが長い時間蛙を相手に遊んでいるところに立ち会うことができよかつたと私は思う。これからも記すように、五歳児の三学期は、幼児期の頂点に達したことを思わせられる事実に出会うことの多い時期である。しかし、そこに至るには、いくつも暗い時期があった。そしてこれから小学校の時期を迎えるに当って、未知の不安が多くある。いつも光に照された陸上を歩くとは限らない。陽の当たらない泥水の中をはいまわることも多いであろう。この明るい時期を喜びをもって受けるのであるけれども、おとなの思いに沿わない混沌の時期があることを当然のことと想っていないければならない。人生の次のステップへと子どもを送り出すに当って、おとなとして認識することのできる人間の発達の両面性である。

(つづく)